

読書し、議論した日々が土台



「高校時代の仲間7、8人とは、今でも年に2回ほど会っています」と米山好映さん

も、東京に出てくると結東力が強いんです」。郷土愛、母校愛も強い。

高校時代の米山さんは、「成績はよくなかった」が、太宰治や丸山眞男の作品を読んでは、まわりの友だちを巻き込んで議論した。「活字信仰の最終世代です」

1浪して早稲田大学政治経済学部。現役で早大に入った親友2人が「勉強して早稲田に来い」といって、東京の予備校や下宿先を探し、英語の辞書まで買ってくれた。応援にこたえるように、

「これだけ勉強したのは人生で初めて」といっような、集中して勉強した。

2010年に富国生命社長に就任した。バブル経済崩壊からの約10年間は、生命保険会社が次々と倒産し、「いま思い出しても緊張する」時代だった。他社にない商品で顧客の満足度を高めることを常に心がけてきた。

「彼は高校で女の子に

もてていましたよ」と米山さんがいうのが、明治大学野生の科学研究所長で人類学者の中沢新一さん(65、69年卒)だ。

「不良っぽいのがかっこいいという人もいたのかな」と中沢さん。甲府一高時代、勉強は好きだったが授業は嫌いで、授業を抜け出しては図書館で本を読んでいた。演劇や小説が好きで「カウンターカールチャー(反権威的な文化)っぽい」友だちと、放課後に喫茶店などで話し込んだ。

フランスの文化人類学者レビストロースがブラジルの少数民族について書いた『悲しき熱帯』は、影響を受けた書物の一つだ。民俗学者だった父と山歩きはしていたが「アマゾン」の熱帯にも行きた「い」と思い、人類学を志すきっかけになった。

進学した東京大学では「何でもできるかな」と宗教学を専攻。ネパールで3年間、チベット密教の修行をした経験も持つ。

宗教学に軸足をおきつつ、人類学や民俗学の分野にも研究対象を広げてきた。会社であれば定年の年齢だが、「やっていない仕事がたくさんある。日本を代表する民俗学者、柳田國男の全仕事を、自分の枠組みで組み替えたい。自分ではまだまだ新進気鋭のつもりです」。

(編集委員・根本理香)



「高校生の頃に読んだ本は、今でも土台となっています」と中沢新一さん